

氏名	藤 綱 徹 也		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	乙 第 8 6 号		
学位授与の日付	昭和39年 9 月30日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)		
学 位 論 文 題 目	先天性内反足に関する研究		
論 文 審 査 委 員	教授 児 玉 俊 夫	教授 砂 田 輝 武	教授 田 中 早 苗

学 位 論 文 内 容 要 旨

1) 矯正ギプスを中心とした先天性内反足の治療経験

先天性内反足は、今日なお、難治の疾患の 1 つと云わねばならない。岡大整形外科教室で、昭和29年～34年に至る主に用手矯正で治療した症例の予後調査を行ったが、成績は比較的悪く、再発或は、再発傾向をもったものをかなり認めた。その後昭和35年より主として Kite の理論に従った矯正ギプス法と Denis Browne 法の組合せを行い、比較的良い成績を得た。そして、その治療の理論的解析を試みた。

〔備考〕 掲載雑誌 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 第 5 巻第 3 号，昭和37年10月 1 日発行

2) 先天性反足の関節靱帯に関する研究

先天性内反足の治療は、Kite が述べた様に、出来るだけ軟骨、靱帯等に損傷を来さない Atravmatic の矯正を必要とする。足関節の種々の非生理的状态が、足周辺靱帯及び軟骨にいかなる影響をあたえるかについて動物実験を行った。実験は、生後 2 週の幼弱家兔を使用し、1) ショパール関節離断群、2) ショパール関節のアキレス腱離断群、3) 対照群、4) 追加実験、足マッサージ群、に分け、その組織像を検した。

その結果、Atravmatic に逐次矯正しようとする Kite 等の理論は、尊重すべきことを証し得た。

〔備考〕 要旨発表 第19回中部日本整形外科災害外科学会

論文審査の結果の要旨

藤網徹也提出の「先天性内反足に関する研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は、次の通りである。

先天性内反足は筋性斜頸及び先天性股関節脱臼とともに、整形外科領域における3大先天性疾患であり、今日もなお多くの問題を提示している。

先天性内反足の治療には徒手矯正を中心にした方法と矯正ギプスにより段階的に矯正する方法とがある。藤網はこの両群の治療を比較分析し、その結果を実証するために人の胎児の解剖と幼若家兎での実験を併せ行った。その研究では、内反足の矯正には暴力を用いて組織を損傷することは避けるべきで、矯正ギプスをできるかぎり愛護的に行い、弛み範囲内で無理のない矯正、固定を行うべきことを示した。

この研究はわが国でも掘りつつある矯正ギプスによる先天性内反足の治療に、理論的根拠を与えたものである。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。